

令和 8 年度 宮前区地域デザイン会議 ～アートでつながる宮前区～

開催報告



日時：令和 8（2026）年 7 月 1 日（水）13:30～15:30

場所：宮前区役所 4 階 大会議室

プログラム

開会／出席者紹介

- （1） 本日のテーマ・目的等について
- （2） 令和 7 年度地域デザイン会議・車座集会振り返り等
- （3） 市の施策の紹介
- （4） アートを通じたつながりづくりの事例紹介
- （5） 【意見交換①】アートが生み出す「つながり」の価値と可能性
- （6） 【意見交換②】アートの「つながり」を広げるための取組・仕掛け
- （7） 今後の予定

挨拶／閉会

出席者一覧

(五十音順)

氏名	所属等
安藤 尚美	・ 川崎市アートコミュニティ形成プロジェクト 「こと！こと？かわさき」第2期ことラー ・ イラストレーター／クリエイティブディレクター
大高 玲	「地域活動支援センターアトリエ言の葉」施設長
荻野 智希	株式会社スペリアル 場づくり企画部
川合 佑汰	・ 株式会社 教育と探求社 ・ 川崎ワカモノ未来PROJECT 1期生
京森 康平	美術家
西村 和子	川崎市アートコミュニティ形成プロジェクト 「こと！こと？かわさき」第1期ことラー
福田 直生	SUNDAE（宮前区つながる美術館協力店舗）店長
村岡 光	・ 株式会社東芝 デザイナー ・ 川崎市アートコミュニティ形成プロジェクト 「こと！こと？かわさき」第3期ことラー
村瀬 成人	株式会社ノクチ基地 アートディレクター
山田 淳史	合同会社MINATO 代表 デザイナー・アートディレクター

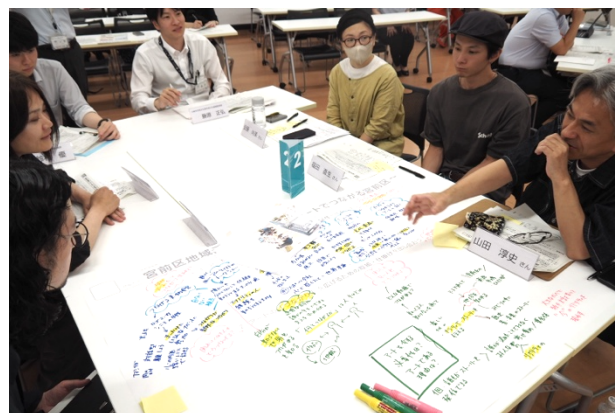
行政側出席者

氏名	所属等
齋藤 正孝	宮前区役所 区長
櫻井 雅幸	宮前区役所 副区長
藤原 正弘	市民文化局市民文化振興室 担当係長
太田 薫乃	市民文化局市民文化振興室 主任
玉井 玲子	宮前区役所まちづくり推進部企画課 課長
宗田 基功	宮前区役所まちづくり推進部企画課 担当係長
鈴木 優	宮前区役所まちづくり推進部企画課 職員

地域デザイン会議の様子



アートでつながるまちの取組事例や施策の紹介



意見交換の様子

宮前区地域デザイン会議 ～アートでつながる宮前区～



グループ

宮前区地域デザイン会議 ～アートでつながる宮前区～



意見交換①：アートが生み出す「つながり」の価値と可能性

アートが生み出す「つながり」に着目し、その価値と可能性について意見交換しました。参加者のこれまでのアートに関する経験などから、以下の観点でお話いただきました。

【視点】

- ・ アートを通じてどういう場面でつながりを実感することができたか
- ・ 人と人、地域とのつながりが生まれたエピソード
- ・ なぜアートだとつながりが生まれるのか
- ・ アートでつながることで、どのような場面（地域・福祉・教育・観光など）で、どのような主体（子ども、高齢者など）に効果的か

[1 グループ]

荻野さん

- ・ 空き家を活用したシェアハウス「シェアトラックス宮崎台」を運営している。その場をアートで開いていくことで、シェアハウスの住人と地域の住民が混ざり合う場になっている。興味さえあれば誰でも参加できるので、さまざまな企画を実施することでさまざまな人が関わり合うことができている。月2回安藤さんの企画、ひと箱本棚、子ども食堂などを実施している。
- ・ 継続的に「アートにつながる場」として活動することで、アートを生み出す人、楽しむ人双方に認識され、活動の輪がさらに広がり、「やりたい」ひとがどんどん集まってくる場になっている。それによって、まちがさらに楽しい場所になっているのではないか。

西村さん

- ・ 川崎市役所主催の「Museum+205」では、昔の写真を展示して、今の写真と比べながら対話型鑑賞を行なっている。写真は参加のハードルが低く、誰でも感想を言いやすいので、ふらっと訪れて多世代のつながりが生まれている。川崎という場所を通じた共通言語があるので、人と人がつながりやすいテーマだと感じている。
- ・ 同じ場所で暮らすからこそその気づきや共有する想いによってつながることができる。

川合さん

- ・ 初めての東京オリンピック開催時の記録映画の鑑賞会がみやまえで開かれていた。映画はアートより敷居が低く、自己投影しやすく誰でも参加しやすい。鑑賞会では、全くつながりのなかったシニアの参加者から当時の思い出を聞くというつながりも生まれた。
- ・ 映画を通して、地方から集まった労働者が埋め立てて作ったオリンピック道路の歴史を知り、過去とのつながりを感じた。

- ・鷺沼でも再開発によって風景が変わっているので、当時の住民の感情に共感することもできた。

村岡さん

- ・転居届を出すため宮前区役所を訪れた際に安藤さんのつながる美術館の展示を見て、「面白い区だなあ」と思ったところから、ことラーになり活動している。
- ・キャッチーな名前と「あなたが宮前区でやりたいこと何ですか？」というタイトルのウィッシュツリーがあった。そこには「古本屋やりたい」という意見など、実際にやれそうなことを書いた人がたくさんいて、自分もやれそうだった。

村瀬さん

- ・所属しているノクチキチのメンバーが各区で映像アーカイブを上映するプロジェクトをしていた。区によってテーマをかえて実施し、まちの風景やまちをいつもと違う目線で見られる企画になっていた。
- ・10年ほど前まで、参加型アートの「かわさき色輪っかつなぎ」を7~8年実施していた。ビッグアートで、最終的には6~7kmも色輪っかをつなげた年もある。視覚的にも、市内の色々な団体や人々がつながってできるアートだった。
- ・色輪っかを作るというハードルの低さもあるが、それを作ったり、つなげたりする過程でたくさんの方が協力した。協力があるということは裏方として関わる、つながる人がたくさんいるということ。直接アートをしたり、見たりという以外のつながりが生まれる企画を設計することもできる。

[2グループ]

安藤さん

- ・つながる美術館で、ロゴマークの作成に関わってくださった書道家の女性が、つながる美術館をきっかけに、さまざまなアートに関わるイベントに参加してくださるようになった。
- ・その方がさらにお友達をご紹介して下さりなど、つながりが新たなつながりを生み出している。
- ・対話型鑑賞では、ファシリテーター／コーディネーターが鑑賞しながらアートについて問いかけてくれる。心の内面の深いレベルで話せることがアートの価値だと思う。

京森さん

- ・聴覚障がいのあるアーティストのトークショーに行った際に、自分にはない視点に出会うことができた。世の中のマイノリティな視点や自分にはない視点や経験を知ろうとするきっかけ・場になった。

大高さん

- ・ レンタルアートをオフィスなどに飾ってもらうことで、社員やお客さんとの会話が増えたという声をいただいた。アートが社会の役に立ったという経験だった。また、とあるグローバルなスポーツ会社では、言語の壁を超えて、心で感じることは世界共通であることだと感じてもらった。
- ・ ONEART 展では、作家や参加者など区別のない展示を行っている。作者の名前や説明などを記載しないことで、先入観なくアートを見られる展示。様々な方に参加いただき、100 名程度にご参加いただいた。近年では、アートを楽しむ仕掛けとして、お気に入りのアートに投票することも実施している。その人の属性ではなく、内容や「個」でつながるためのきっかけとして、アートの価値は高いと思う。
- ・ 子どもがアートをのびのびと自由につくることで、自己肯定感につながると実感している。

山田さん

- ・ 溝の口のミューラルアート（壁画）は、地域の文化や資源を可視化している良い例だと思う。モニュメントのような存在で、アートを通じてまちを知り、つながるきっかけになっている。
- ・ 渋谷区（富ヶ谷など）では、まちなかの落書きについて小学生と一緒に考えるというプロジェクトが進んでいる。どんな絵を描けば再び落書きがされないか、などについて、小学生が地域と考え、実施していくというプロセスに共感する。地域で合意した内容だからこそ、アートが次の代の小学生にも受け継がれ、地域も受け入れられるものになっていると思う。

福田さん

- ・ 共通の価値観・視点・趣味などを持つ方が、カフェでつながりから、展示されているアートの話題になることもあります。店長として、お客様の興味をもとに、話題を振ることもある。
- ・ 「つながるみんなのアート展」の展示場所として、8 月から 3 ヶ月間、カフェの空間を提供する予定。

意見交換②：アート「つながり」を広げるための取組・仕掛け

アートが生み出す「つながり」の価値を踏まえて、この「つながり」を広げていくための取組や仕掛けについて、以下の観点で意見交換しました。

【視点】

- ・アートの「つながり」の価値を最大限生かすための活動や場面
- ・どういう工夫があれば、人や地域を巻き込んでいくことができるか
- ・関わった人が、次の人、別の場所につなげていくための仕組みや工夫
- ・アートへの関心の有無に関わらず、区民が身近にアートやアートの「つながり」を実感できるための工夫

[1 グループ]

アートを「作品」として整える仕組みづくり

●アートを「作品」とするハードルを超えやすくする仕組みとして、誰もが利用できる「フォトブース」等があると良いのではないかと

- ・「スモールミュージアム」という、子どもの作品をしっかりとディレクションして作品集をつくることで、本物のアートとして味わえるようにする取組みがある
- ・ヘラルボニーも、障がい者アートをカッコイイ作品としてディレクションしている
- ・アートの取組みやすさは大切だが、「敷居の高さがアート」という側面もある。制作物にしっかりとディレクションが入ることによって「作品」として扱うことができる
- ・「ディレクション」のひとつとして、撮影がある。しっかりとスポットライトを当てて撮影することで「作品」として見られるものになりやすい
- ・かつて、原宿で通行人が利用できるフォトブースを設置したことがある。さまざまなファッションの人やギャルなどを撮影して、とても面白い取組みになった
- ・誰もが制作物などを「作品」化できるフォトブースのようなものがあると良いのではないかと

●都心ではなく、わがまちでカッコイイアートを生み出せると良い

- ・若い人はカッコイイものを求めて都心へ向かいがちだが、住んでいるまちがカッコイイアートが生み出し続ける場所になると良い

アートに関心のある人がさらにアートに触れやすく制作に取り組みやすい場を増やす

●人が集まりやすく、制作環境も整っている学校を開いて、アートを生み出し、教える場にしてはどうか。子どもから大人に教えるのも面白いのではないかと

- ・学校には、美術室や図工室があり、アートを生み出せる環境が整っている

- ・プロが学校で公開制作などをすると、子どもや地域にとっても大変よい刺激になる
- ・学校では書道アートもできそう
- ・学校の美術室や図工室は子どもも来やすく、大人も行きたい場所。人が集まりやすいのではないか
- ・普段は大人が子どもに教える場だが、子どもが大人に教える場にしても良い
- ・学校アートキャラバンのようなことができると良い

●使っていないもの/使われていないものをアートに活用する仕組みができると良い

- ・住宅が特定空き家となると、税金が高くなるという仕組みがあるが、空き家をアートで活用すると税金が安くなるなど、プラスのインセンティブがあると良いのではないかと

●個人所有の美術本をみんなで楽しむイベントや場づくりからアートを広げる

- ・第6南荘で個人所有の美術本を見られる図書館のような場を作っている方がいる
- ・貴重な美術本を所有していても、ひとりで見る機会は少なく、もったいない。おすそわけのように、色々な人と分かち合えると良い
- ・美術本を使った対話型鑑賞会などもできそう

アートに関わりの少ないものや人を巻き込みやすくする仕組み

●アートから遠そうな場所や、一見やってくれなさそうな人を巻き込んでみると良いのでは

- ・このまちにこんな人いたんだ！と発見になる
- ・病院、薬局、塾などでアート

●町内会の掲示板や住宅の塀などを活用して、アートを展示する場をまちなかに増やしてはどうか

- ・町内会の掲示板を活用して、掲示板の一区画で展示
- ・掲示板ラリーなどで、掲示板を見つけながらアートも楽しんではどうか
- ・理解してもらえかが心配だが、まずは小さくスタートして、できそうなところからやってみることが大切
- ・「のきさきアート」麻生区アート掲示板「アートこみち」などすでにある取組みもある
- ・展示場所を伝える Web サイトなどが充実すると面白そう
- ・フリーアートウォールとして、住宅の塀も活用できると良い

●すぐに展示できるセットをクラウドファンディングなどで作れると良い

- ・作品が雨風で劣化しない展示セットなどがあると良い

- ・クラウドファンディング活用して展示セットを作成すると良いのでは

●宮前区の特徴として、直売所にアートが飾ってあるなど、農とアートがつながると良いのではないか

- ・宮前区らしく、小さい畑、都市農家とアートの取り組みをつなげられないか
- ・小川さんやってくれそう
- ・関わってみたい
- ・農家めぐりウォーキング
- ・畑のマナーポスターを制作した時も、農家さんはなかなか貼ってくれなかった

●竹を活用できないか

- ・土橋には竹農家が多い
- ・区役所前のスロープで流しそうめん
- ・竹が多く使い道に困っている

鷺沼駅前の再開発とアートプロジェクトを掛け合わせる

●鷺沼駅前の再開発の仮囲いを活用してアートができないか

- ・仮囲いでなにかできそう
- ・パネルに夢やこうなったらいいなという希望を書く。左下に QR コードをちけるなど
- ・アーティストが仮囲いに絵を描く
- ・子どもが消えるチョークで絵を描くイベントを実施する
- ・仮囲いを撤去する時にも“とむらう”イベントができるとよい

●再開発に関わることで景色が変わっても「自分たちのまち」だと思えるようになる。取り組みによってまちに関わり、地域の人々の顔が見えてくるとよい

- ・関わると“自分たちのまち”と思える
- ・子どもたちに、家族以外でお世話になっているひとは？と聞くと「マンションの管理人さん」という答えが多く返ってくるそう
- ・「さぎぬまってひとだよね」の取り組みのように、人の顔が見える取り組みができるとよい
- ・平田オリザ「寂しさへの処方箋 芸術は社会的孤立を救うか」集英社

[2 グループ]

「つながること」の必要性

●必要な時に支えを求めることができる関係性があることが大事

- ・常に誰かとつながる必要はなく、アートを通じて誰かの手を握ることができることが重要

●アートを通じて「何と・誰とつながるか」は人それぞれ

- ・対作品、地域、人、情報
- ・アーティスト同士でつながる

●つながること自体が目的ではなく、その先にある豊かさを感じて心がつながることが大事

- ・目的はつながることではない
- ・アートを通じて豊かさを感じる、心がつながる

●アートに関心がない人とどのようにつながるかが大事

- ・どんな動線でつながれる？
- ・知っている人、知り合いを通じて

アートである必要性や理由

●自分が知らない世界とつながれる／を知ることができる力がある

- ・アートを通じて何かを「みつける」ことができる

●誰もが自分のストーリーやリアリティを自由に表現することができる

- ・アートである理由や必要性は、個人として誰もがナラティブやストーリーを自由に発信できることにある
- ・誰かが決めたことではなく、自分のリアリティを表現できる
- ・楽しいプラスアルファのナラティブ・ストーリーを伝えることができる

●地域の歴史や未来についてストーリーを通じて知る・伝えることができる

- ・歴史、昔・未来のストーリーを伝える

広げるための取組や仕掛け

●大きな壁に絵や文字を描いて、「今」の宮前のリアリティを表現する

- ・例えば、鷺沼に建設中の新区役所の仮囲いに、個人が自分のストーリーやリアリティを貼り出して共有できるようにする
- ・みんなのリアリティの寄せ集め/集合体

●アートの視点でまちの資源を巡るツアーを開催する

- ・ 地域資源
- ・ みどりが豊か
- ・ 宮前区の資源：北部市場、とんもり谷戸
- ・ ことラーなどに案内や紹介をしてもらえると良い
- ・ アートの視点で地域資源を知るきっかけになると良い
- ・ まち中にある彫刻を見に行ってみみんなでスケッチするなど、体験も交えられると良い

●地域の魅力を再発見できる「アーティスト・イン・レジデンス」のしくみを

- ・ 地域の魅力を再発見する「アーティスト・イン・レジデンス」
- ・ アーティストに宮前区で過ごしてもらい、アートを制作してもらう

●ペイントベンチやウォールアートなど、地域の資源を可視化できる物を設置する

- ・ ペイントベンチやウォールアートなどの可視化できる物の設置

●関心がない人を巻き込む仕掛けとして、オンライン美術館とレンタルアートのさらなる発展を

- ・ オンライン美術館とレンタルアートのさらなる発展（地域アート応援協力店制度）

●地域を巻き込む仕掛けとして、商品のパッケージデザインを子どもと考える

- ・ 色々な商品、パッケージデザインがらみの取組
- ・ 小学生と一緒にパッケージデザインを考えるなど行えるのではないかな

●宮前のアートやアーティストに触れられる空間や拠点をつくる

- ・ みやまえアートコレクションの展開、アーティスト
- ・ アーティストが集う専門の建物をつくる（アトリエ？）
- ・ アーティストが集う部屋としてシェアトラックス宮崎台活用
- ・ 誰もが気軽に立ち寄れる「アートの拠点」づくり

●アートの情報を集めて発信する

- ・ アートのまちジャーナル（情報があつまる）
- ・ 今は安藤さんが個人で冊子を制作しているが、定期的に発信するような仕組みがあると良い

●自由に表現できるコミュニティや場があると良い

- ・ 余白、逃げ場があること
- ・ 大きな壁に絵や文字を書いて“今”のリアリティを現す